



校長室だより

自立に向かって「自分から」

学校と家庭・地域を結ぶ架け橋通信

第22号 令和5年2月20日

小美玉市立美野里中学校

「芽が出る」ということ

よく「暦の上では」という言葉を使いますが、昨日2月19日は、二十四節気でいうところの「雨水」にあたるそうです。「雨水」とは、「雪が雨に変わり、草木が芽吹き始める時季」をいうのだそうです。言われてみると、寒い中でも、庭の花壇やプランターから様々な緑色の目が見え出し始めています。

種が発芽するためには、一般的に3つの条件が必要だと言われています。それは、「水」、「温度」、「酸素」です。（植物によっては、これらの要素のほかに光や刺激が必要な場合もあるそうです。）

種の中には、生物が成長していくもとになる「胚（はい）」と、成長の養分となる「胚乳（はいにゅう）」があります。発芽していない種は、いわゆる「眠っている」状態にあります。「眠っている」状態の種は、乾燥や寒冷などの過酷な環境にも耐えることができ、長い寿命を保つこともできます。

しかし、前述の3つの条件が揃うと、眠りから覚め、胚が成長して芽や根ができ、種皮を破って外へと成長を始めるのです。



植物の話をしてきましたが、子供に置き換えてみるとどうでしょう。一見、普段どおりの生活をしている子供が、何かをきっかけに考え方や行動がガラリと変わるということはよくあることです。

「水」と「温度」と「酸素」にたとえるなら、「水」＝「うるおい」、「温度」＝「愛情」、「酸素」＝「苦しくない空気」＝「心地のよい場所」といったところでしょうか。

子供たちには、将来、ぜひ自分にとって「適切な」居場所や職業で、芽を出してほしいと思います。そして根をはり、自立してほしいと思います。

一方、「芽が出る」という言葉には、「彼は、長い苦労の末、やっと芽が出た」といった例文で使われるとおり、「幸運が回ってくる」という意味があります。

地道な取り組みをしている人は、世の中にたくさんいます。地味で目立たなかったり、他人には見えづらかったりすることがありますが、あるとき、頑張っている姿をふと目にすることがあります。

本当に、真面目に一生懸命物事に取り組んでいる人を見ると、「何とか芽が出てほしいな」という気持ちになり、応援したくなります。幸せになってほしいと願いたくなります。子供たちには、ぜひ、他人からも応援されるような人になってほしいと思います。

もうすぐそれぞれの春がやってきます。春に芽を出す子もいるかも知れませんが、もう少し時間をかけて芽を出す子もいるかもしれません。

我々大人は、少しゆとりと寛容をもって、「芽が出る」のを楽しみに待つ姿勢が必要かも知れませんが、その子の人生は続きます。時期は違えど、素晴らしい花を咲かせる可能性を皆がもっています。